九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

セクストゥス・エムピリコス、『ピュロン主義梗概』Ⅰ巻一章-十四章に於ける〈エポケー〉に関する一考察 ： 「探究」という概念との関わりで

筒井, 明子

https://doi.org/10.15017/1398502

出版情報：哲学論文集. 26, pp.41-61, 1990-09-30. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

セクストゥス・エムピリコス、『ピュロン主義梗概』Ⅰ巻一章—十四章に於ける〈エポケー〉に関する一考察

——「探究」という概念との関わりで——

筒井明子

序論

本来、懐疑主義と、一括して把握され得る様な主張は皆無に近い。そして、それに加え、それに対する理解度もまた、各時代に於いて様々な点で相違している。(1)

しかしながら、そういった諸困難を踏まえた上で、猶且つ、当論文では、多様な側面を持つ懐疑主義の実相の中から、一つの試みとして、セクストゥス・エムピリコスの残した一著作を取り扱うことにする。基本的に、彼の唱える、ピュロニズムに於いて、懐疑という事自体が、何を意味していたのかを調査してみる事にしよう。

さて、セクストゥスの場合、その基本的立場は次の様に表現されている。

「P—懐疑主義哲学についての様々な名称について—

さて、懐疑主義学派は、一面にあって、それが、探究し、吟味するという点に則してみると、その活動からして、探究しつつある学派とも呼ばれ、また、そのような探究の後で、考察を行う当人の心に結果として起こる情態からすると判断中止をする学派とも呼ばれる。そして更に、或る人々の唱えるが如く、万事につけて、アポリアを見出し、探究を行うという点から、乃至、肯定することや否定する事に対して、それを決める手だてを持たない事から、懐疑的学派とも呼ばれるし、また、ピュロンという人物が、彼に先立つ人々に比べて、より実質的に且つ顕著に懐疑哲学の中に踏み込んだと我々に思われる事から、ピュロン主義とも呼ばれる。」(2)

以上の立場の表明から、我々は、セクストゥスの語ろうとする主義が、多様な側面から見つめられている事を理解しなくてはならない。

懐疑主義哲学の内容を一言で規定する事は、従って、至難の技である。ただ、その主義の内容を表現するのに最も手近な概念は、やはり「エポケー」であろう。この点に関しては、セクストゥス自身が、再三再四言及しており、説明も与えている。我々は、現段階では、一応この「エポケー」を「判断中止」と訳するとして、この概念を、懐疑主義哲学の内容理解の一応の目安と見做しておくことにしよう。

そこで、我々の当初の問題意識を振り返る。懐疑主義が、「エポケー」を唱えつつ、且つ彼自身が同時に「探究しつつある者」である事は如何にして可能なのだろうか。懐疑主義者は、疑うことに依って「エポケー」即ち「判断中止」へと至ろうとする。彼等にとって、疑う事が、探究する事であるとすれば、探究の目的は、探究をしなくなる事になるのではあるまいか。(3) この一見、パラドキシカルな疑問を我々は今抱え込んでいる。一言で言えば、懐疑主義者セクストゥスが、自らの学派を「探究を続ける学派」と名づける事それ自体は、どの様にして成立し得るのであろうかということである。

アポリアとは、周知の様に、ソクラテスにとっては、探究する事へ向かう一種の出発点であった。[4] 然るに懐疑主義者は、そのアポリアへと向けて、探究を進めて行こうとしているのである。改めて問う。懐疑主義者にとって探究とは、どのような在り方をしていたのか。

以上を以って当論文の序論とする。

Ⅰ

セクストゥスが第一章に於いて、自らの学派を懐疑主義と規定する場合に、彼が、基本的に、思想・探究に対する態度として、三つの形式を分類する点を考えてみる。

彼に於いて、(イ)「探究」という概念は、(ロ)「発見する事」や(ハ)「その発見を否定して、その事柄が把握不可能であることを承認する事」と区別された場所で理解されている。[5]

以上の三種の区別は、そのまま、哲学上の三種の立場、(ロ)独断論者、(ハ)アカデメイア派、(イ)懐疑主義者の立場として把捉される。そして、セクストゥスは、懐疑主義者達こそが「探究し続けている」[6]と規定している。

独断主義者が、真理を発見したとし、アカデメイア派の人々が、真理を把握し得ないとする中で、懐疑主義者は、常に「探究し続ける」のである。

従って、この時、懐疑主義者セクストゥスが探究するのは、真理を発見する事とか、発見出来ないと見做す事とは、大きくかけ離れた状況設定である。換言すれば、懐疑主義者は、真理を発見するのでもなく、また、発見できないと放棄するのでもなく、活動していると言える。

では、こういう場面で、懐疑主義者は、真理に対して、具体的に如何なる態度を抱いているのだろうか。彼は、真理を目

指してはいないのだろうか。セクストゥスが、自らの学派を「探究しつつある」としか規定しない時、その探究の目的を彼は敢えて伏せているのではないだろうか。「真理を探究しつつある」と何故、言い切ってしまわないのか。

P. H. I. 二章の下りは、文脈的に見て、「哲学を巡る諸々の探究者に関して」語られている。従って、真理は、これらの探究者が探究をする目的として設定されて、登場していると考えるのが妥当であろう。それにもかかわらず、他の二つの学派(ロ)(ハ)を説明する時に当っては、いつも、「真理を発見した」とか、「真理を把捉することは不可能であると宣言した」とかという表現を用いていながら、いざ、自身の懐疑主義学派(イ)に対しては、単に「探究しつつある」としか規定していない。

彼の主義で、「探究」は、他の二つの立場とは、明確な一線が画されていると見なくてはなるまい。それは、発見する事の是認、否認とは、また区別して考えるべきである。

以上の諸点を再考しておこう。

懐疑主義的立脚点は「真理を探究する」事にあるのではないということの意味は、彼等にとって、真理が、予め発見されるべくしてある様なものではない事であったし、発見する事を放棄してしまうことのできる、自明の了解事項としてあったのでもなかった。彼等は、未だ顕現していないものとして真理を考えていたのではあるまいか。あるいは、発見しようとか、その発見を放棄しようとかという次元とは別の所で、理解していたのではあるまいか。彼等は、「探究しつつある」人々である。では、その探究とは何を目指していたのか。文法的に見ても、懐疑主義者を語る「探究しつつある」には、常に目的語が欠けている。彼等が果して何を探究していたのか、我々は疑問に思う。「探究の持続（ἐπιμονὴ ζητήσεως）」と言うけれども、ただ当てどもなくどうやって探究できるのか。「探す」という語は、現在的に自分のものとして手に入れていないものに関して使用される。従って、探すからには、無いものをこそ求めている筈である。それが所謂「真理（τὸ ἀληθές）」ではないとすれば、他の何だったのだろう。

懐疑主義者セクストゥスが、「探究」という言葉を用いる時、そこには、通常の研究が思い描く様な「真理を」という意味

合いは抹消されているとしか言えない。

テキストの冒頭の書き出しでは、「何か或る事柄を探究する人々にとって」となっていて、そのうちに、懐疑主義者も、広義での探究者の中に含まれる事になるし、少なくとも「何か或る事」を探究している人々に属するのでなくてはならない。彼は、従って何かを探究してはいるのである。そして、それが普通一般で言われる真理ではない事自体が、懐疑主義者の立場を明確化していると思う。真理を発見したとすれば、独断論者になる。真理は発見できぬとすれば、アカデメイア主義者になる。それら二つとは区別される所で、懐疑主義者は、常に「何か或るもの」を「探究しつづけている」のに他ならない。

一章で重要なのは、三種類の立場を提示することによって、他から区別される自らの立場を、極端に言えば、他の二つを積極的に言表して、逆に自分の立場について、押え気味に言う事に依って、却って、懐疑主義の特徴が、本当はどこにあるのかを明確化している点だと考えられる。「探究」は、彼、セクストゥスにあっては、他の二つの立場の追求するのとは別の意味合いに於いて提示され、且つ強調されているのである。

II

この第四章では、懐疑主義を端的に分析して行こうとする。ここで我々が最も関心を持つのは、「エポケー」と「イソステネイア」ということである。語源的に「イソステネイア（ἰσοσθένεια）」とは、エピクロスが諸感覚に関して使い、クリュシッポスが、禁欲主義を語る場面で用いている。(7)

まず、第四章の第八節を訳出してみよう。

「懐疑主義とは、諸々の現れと思惟されるものどもについて、あらゆる仕方に即して、反対定立を立てる能力である。そしてその能力から我々は、対立して措定される事柄や、諸々の言論に於けるイソステネイアを通じて、第一に、エポケーに、

そして次に魂の平静さへと到る。[8]」

以上の文脈から理解され得るのは、イソステネイアが、対立して措定される事柄や諸々の言論に関与しているという事である。それは、具体的に言えば、等しい力を持つ事柄乃至言論を、相互に張り合わせた時の、その両者の牽引力の等しさの事を言う。

更に、引用をしてみる。

「さて、イソステネイアという事で我々が意味しているのは、信憑性（πίστις）と信憑性の無いこと（ἀπιστία）についての等しさであり、具体的には、相対立する言論の一方を、他方に比較してみて、どちらかを、より信憑性のあるものとしては定めないという事を意味している。[9]」

従って、対立する言論同士の間に、信憑性の点で優劣をつけないとする事が、その本意と見るべきであろう。

この時、イソステネイアが規定されているのは、命題、言論の真偽についてではなく、あくまでも、その信憑性についてであるという事がポイントであり、重要であると考えられる。

懐疑主義を規定する時に、キーワードである「エポケー」が、この「イソステネイア」を通じて了解されているという事、そしてその「イソステネイア」が、対立する諸言明の真理、偽りを問題にしているのではなく、あくまでも常に信憑性の有無に関わっているという事は、懐疑主義の「探究」の意味合いに深く浸透して来ると考えられる。懐疑主義者は、或る命題を真であり、他の命題を偽であると断ずる独断論者ではないし、どの様な命題についても、真も偽も放棄するとするアカデメイア主義者でもない。彼は、命題の真偽の区別を断ずるのではなく、その信憑性の問題にしか迫ろうとしない。

次に、この「イソステネイア」を通じて導出される「エポケー」と「魂の平静さ」の考察に移ろう。

「さて、エポケーとは、我々が何かを否定も肯定もしないところの思考の状態である。そして、魂の平静さとは、魂が妨害されないこと、静寂であることである。[10]」

「エポケー」が何ものについての肯定も否定も避けるという事は、「イソステネイア」が、諸命題の信憑性にしか関与しないことによって実現される。懐疑主義者は、独断論者ではないのである。

では、ここで、「エポケー」と「魂の平静さ」の関係について触れておこう。本文中では、後に語られる事とされている以上（P. H. I. ch. 4, 10節）、我々が出来るのは、せいぜい、何故、「エポケー」が「魂の平静さ」に先行し得るのかという事である。実質的なレベルで考えてみた場合、果して、両者はそれ程容易に先後関係を決められたり、区別できるものなのだろうか。

確かに、「エポケー」即ち「判断中止」とは、思考の状態に関わるものであり、ひいては「イソステネイア」を介して、諸々の事柄と諸言明に関わっている。「エポケー」も「魂の平静さ」も、両者とも、先述の「イソステネイア」を通じて導出されているのではあるけれども、諸言明の信憑性に、一種の同等性を置き、対立する言明のどちらにも、信憑性の点で優劣のつく力点を置かないそれは、既に魂の平静さに到達しているのではなかろうか。

換言すれば、懐疑主義者セクストゥスが、「エポケー」を、「イソステネイア」の側面から把握しようとする時点で、彼は「エポケー」の独自性を或る意味で抹消しているのではあるまいか。

「探究しつつある」者とされる懐疑主義者は、真偽ではなく、信憑性を重視する。では、その信憑性とは、一体何なのか。平静さという側面に於ける魂と、「エポケー」という形にという側面に於ける思考を、セクストゥスは、どの様にして区別し得るのであろうか疑問である。

最後に、懐疑主義者が、「現れるものどもと思惟されるものどもを、如何様なる仕方にあっても、対立させて措定する能力」と主張される事を少し考えてみよう。

言うまでも無く、セクストゥスが最も強調したがっているのは、「対立させて措定する（ἀντιθετικήν）」事である。それは、独断論者の立場を強く意識して使用されている言葉であると言わなくてはならない。彼が、「探究しつつある」者である

事の意味を、我々は、この一語に読み取らなくてはならない。[11]

III

第六章では、懐疑主義哲学の基本的原理（αἱ ἀρχαί）が語られる。この箇所は、我々が触れずに済ました第二章で紹介された、懐疑主義の議論構成の説明に正確に対応している。

ここでは、懐疑主義の原理は、魂を平静に保つことへの希望であると規定される。そして、その理由として次の事が言われている。「人々のうち能力のある者達は、事柄に於ける平坦一様でないことによって心を惑わされ、それらの物事のうち、どれにより納得すべきであるかに迷い（ἀπορήσαντες）、そうすることによって、事柄に於いて何が真であり、何が偽であるかを探究すること（τὸ ζητεῖν）へと向かう。彼等は、それらに決着をつけることによって魂の平静さを得ようと望んでいるのである。[12]」

以上の文脈から察せられるのは、懐疑主義は、まず、事柄の平坦一様でない事に心を惑わせ、次に、不如意、行き詰まりに陥り、然る後に、真偽の探究に向かい、そしてそれらの過程を経ることで、最終的に、当初の目的たる「魂の平静さ」を希求しているという構造である。

ここで重要なのは、懐疑主義の原理が持っている基本的構造の順番である。彼は、まず事柄の平坦一様でない事に心を乱す。そして結論の出せない行き詰まりに陥る。然る後に彼は「探究」するのである。

我々が第一章で考察した所に依れば、懐疑主義者は、基本的に「探究しつつある」者として規定されていただけであり、却って、その事を語ることによって、他の独断論者とか、アカデメイア派の立場から、自らを乖離させていた。その場面での「探究」には、「真理を」という目的語がついていなかった点が、懐疑主義の立場の在り方を規定する一つのポイントであ

ると、我々は見做していた筈であった。

けれども、この第六章で語られる「探究」には、具体的に、「事柄に於いて何が真であり、何が偽であるのか」という目的句が付着している。第一章と第六章の記述の間に一種の矛盾があるのではないか。「探究」の意味を巡って。我々は、この問題をそう簡単に片付けてしまうことは出来ない。もう少し第六章を正確に読んでみよう。

「そして、懐疑主義的立場の原理とは、何よりも、全ての言論に対し、それに等しい言論を対峙させる事である。というのも、そのことから、我々は、独断を下さない方向へと終わるからである。[13]」

つまり、セクストゥスの立場では、やはり、一方の独断主義との相違を明確に意識していると言わなくてはならない。一方で、独断主義が、相矛盾する言論のどちらか片方に力点を置いて、その言論について真と判断し、そこに於いて、自らの立場を貫くとするならば、他方、懐疑主義は、相対立する言論を、そのまま対立させ「対峙（ἀντικεῖσθαι）」させておくまである。彼は、それらの言論のどちらにも独断を下さない。「対峙」を求めている懐疑主義者は、その対峙から、独断的な真理を掲げはしないのである。その結果、彼には、「魂の平静さ」が得られるのであり、またそのことを彼は希望している。

では、懐疑主義の自己規定にある「探究しつつある」者という表現と、彼等の希望する「魂の平静さ」とは如何なる関係にあるのか。

現在の段階で、第六章での「探究すること」とは、第一章での「探究しつつある」とは異なっていると考えなくてはならない。換言すれば、第六章に於ける「探究」とは、その先に独断主義に陥る可能性を残した段階での探究であるのに対して第一章の方の「探究」は、むしろ「魂の平静さ」にある時点での懐疑主義者の精神の在り方を示していると言えるからである。懐疑主義は、独断主義と、この点で異なっているのであり、それが、「魂の平静さ」にあって「探究しつつある」者であることによって、セクストゥスは、懐疑主義の方を、独断主義よりも優位に位置付けていると考えられる。何故なら、懐疑主義は、「魂の平静さ」を希望することによって様々な「対峙」を、それとして認めているからである。

事柄の真偽を探究することを確立することから生ずる独断に、彼は陥らず、精神の均衡を求めようとする。従って、懐疑主義者にあっては、相対立する命題は、そのまま対立していて結構である。むしろ彼は、そういった「対峙」する命題をこそ求めている。独断主義に陥らない為に。独断主義は、矛盾対立した言明を許さない。彼等は、どちらか一方を真として、どちらか他方を偽として、真偽の区別を判定し、真理を追求していると称する。彼等は、自分達の主張に矛盾する立場は、異質なものとして、乃至偽なるものとして退けてしまう筈である。

では、懐疑主義はどうか。セクストゥスの唱える所に準拠すれば、彼等は、何事にも、決定を下さない。或る命題が措定されると、懐疑主義者は、敢えてそれに対立する等価値の命題を押し出し、それら両者を、意図的に対峙させることによって、「魂の平静さ」を獲得しようとしているのである。彼は、終始、そうして「探求しつつある」者であった。[14]

IV

「懐疑主義者は、独断を下すか否か」を語る第七章では、文字通り独断論の立場を明確に意識した上で、セクストゥスの立場である懐疑主義を、相剋の形で説明している。我々はこの箇所を各節毎に考察することによって、セクストゥスの思考脈絡を追跡してみることにしよう。

十三節では、懐疑主義者が、どの様な意味で独断を下さないとしているのかを語る。

懐疑主義が独断を退ける場合には一つの難点がある。それは、彼が、独断論を批判しているというまさにその事に依って、彼もまた既に独断を下しているのではないかというものであろう。基本的に、我々はこの問題意識を念頭に置いた上で、この節の解明に努めたい。

形式上の構文は、まず、懐疑主義が、独断主義の唱える「ドグマ」に即した意味に於いて、独断を下していないというの

ではなくて、「諸々の知識に関しての明証的でない探究が、或る物事に対して肯定する時のそれである。というのも、ピュロン主義者は、明証的でない事柄に対しては、何にでも肯定しはしないのだから。[15]」

一見して理解出来るのは、この一文が、まず「意見（δόγμα）」の意味を巡って構成されている点である。懐疑主義者が独断を下さないと主張する時、その時、排除される「意見―臆見」の意味内容が、二分割され、一方が否定され、他方が肯定される形で、独断しないと言っているのである。

次に観察出来るのは、懐疑主義者が、ドグマを否定する時、それが「明証的でないもの（ἄδηλα）」に関わって来るという事である。ピュロン主義を唱える哲学者が、明証的でないものに対しては肯定しないという事が、一種の事実として認められていて、それ故、独断論者の唱える独断は下さないと言っているのである。この場合、「明証的でないもの」とは具体的には何を意味しているのかは未だ明らかではないけれども、それが、懐疑主義が独断を排斥する場面の一つのポイントとして持ち出されている事に変わりは無い。

さて、次に我々は、C. Stough が指摘している[16]「θερμαίνεσθαι」と「ψύχεσθαι」について語らなくてはなるまい。基本的に、これらの言葉が語られるのは、懐疑主義者が、その意味に即してではないという意味で、独断を下さないとしている場面であり、その事を懐疑主義者自身の立場から理由付けている括弧の中の文章である。即ち

「というのも、懐疑主義者は、印象（φαντασία）に即して、必然的に生じた諸々の情念（πάθη）に同意するのであるから。例えば、彼は、熱く感じている時や、冷たく感じている時に、『私は熱く感じていないと思う』とか『私は冷たく感じていないと思う』とは語り得ないのである。[17]」

ここでは、パトスに同意することの具体例として、パトスとは反することを思うとは語れない事が挙げられている。[18]

通例の独断論者のドグマの意味では、懐疑主義の立場とは相容れない。懐疑主義者は、パトスに同意するのであって、パ

トスに相反するドグマを語り得ないのである。懐疑主義者の方のポジティブな立場をここに読み得るとすれば、「印象に即して、必然的に生じた諸々の情念に同意する」という部分である。

以上の論説から、分析して提示できることを列挙しておこう。

懐疑主義者が、「印象に即して、必然的に生じた諸々の情念」に同意しているという事は、その実例として、「熱く感じていたり、冷たく感じていたりする時に、『私は熱く感じていないとか、冷たく感じていないと思う』と語ることはできない」を持ち出して来れるのだろうか。

パトスに反した思いを語れないという事がパトスに同意する事の実例として用いられる事の意味はどこにあるのか。懐疑主義者は、単なるパトス主義者なのであろうか。[19] しかし彼がパトス主義者であるとすれば、パトスにどうやって同意(*συγκατατίθεται*)出来るのか。感じるがままに同意する時、果して、懐疑主義の立場は、哲学の一学派として、その確固とした地盤を確保し得るのであろうか。

何はともあれ、この場合、最低限に言える事は、セクストゥスは、諸々の情念に同意すると語る時、ポイントは、そのパトスを或る意味で言語化しなくてはならないという事である。「同意」とは、パトスの「ドグマ」化ではなくて言語化である。ドグマ化ではない言語化が可能かという問題は、やはりどこまでもつきまとうけれども、少なくともセクストゥスの中では、両者は、明確に一線を画されていた事は否めないだろう。

懐疑主義が独断論を退ける場面での一つの難点については既に触れておいた。彼は、自らの立場を貫こうとして、独断主義を否定するという形でしか、それを成し遂げ得ないのかもしれない。パトスの言語化が、果して、その事を正当化し得るかはわからない。それが、どこ迄、ドクサではないと言って、区別出来るのであるか。しかし、やはり、懐疑主義は、探究しているのである。そして、彼は、やはり、自らの立場を何らかの形でロゴスに照合させなくてはならない。彼のポジティブな立場については、それが、独断を下さないという時に、逆照射されているとしか考えられない。その意味では、懐疑主

義は、独断論を常に対峙する立場として、批判さるべきものとして措定せざるを得ないのである。

V

Ⅳ章での考察に依って明らかな様に、懐疑主義者セクストゥスが、「懐疑主義者は独断を下すか否か」を論述して行く場面は、独断主義のポリシーを批判し、そして、それとどの様な意味で懐疑主義が一つの確立した学説として擁護され得るのかを調査するのに、重要な箇所と見做さなくてはならない。従って、以上の基本的考察を念頭に置いた上で第七章の残りの記述を詳細に検討する必要があると考える。

第七章の十四節では、独断論者の主張と、懐疑主義者の主張の定式（φωνή）を巡る対立を、比較という仕方で検証している。

最初、懐疑主義的定式を唱える時にも、彼は独断を下してはいないと語られる。具体的には、「どちらとも決められない（οὐδὲν μᾶλλον）」「私は何も規定しない（οὐδὲν ὁρίζω）」がそれである。

この具体例は、紛れも無く懐疑主義的立場の定式であり、それらを主張するに当ってすら、懐疑主義者は独断を下さないと言っている。

我々がⅣ章で考察した様に、彼等にとって諸々の情念に同意する事は、ドグマとは明確に区別されなくてはならなかった。今、彼等は、独断を下さないその領域を、諸々の情念から、定式の領域に移して考察している。そしてその場合に、この領域に付される語は「明証的でないものどもについて（περὶ τῶν ἀδήλων）」なのである。

従って、次に列挙される定式の事例（P. H. I. ch. 7, 14節）が、彼等の側からすると、「明証的でないもの」に属すると考えなくてはならない。その事例の特徴は、どちらも否定形で表現されている点である。

懐疑主義者が「明証的でない」という否定形の言明を下す時、彼は独断論者と違い、独断を下さないという事は、事実上何を意味しているのだろうか。

我々が、以前に確認しておいた様に、懐疑主義者は、懐疑することに依って探究しつつある者である。従って、彼は、探究しつつある事を、換言すれば、己れの立場を、何らかの形で貫こうとすれば、独断主義との乖離をあくまでも鮮明に浮かび上がらせる必要があろう。懐疑主義者が、自らの立場を擁論するに当り、彼等は、「非明証的な」言明に関しても、常に探究しつつあらねばならないのである。

次に、以上の理念を具体的に独断論者との比較に於いて、懐疑主義者の立場を示す場面の考察に入ろう。

「というのも、一方で、独断論者は、彼が断定しているとしている彼の事柄を、実際に存在するものとして措定する(ὑπάρχον)のに対し、他方で、懐疑主義者は、諸々の言明を、それらが、全き意味で現実に存在しているものとして措定はしない。何故ならば、彼は、『全ては偽である』という言明を、他の諸々の言明と共に、その言明自身も偽であると語り、また、『何ものも真でない』という言明にも同様に語る。丁度それと同じ様にして(非明証的な)『どちらとも決められない』という言明も、他の諸々の言明と共にそれ自身をも、どちらとも言えないと語り、そして、それ故に、他の諸々のものどもに対して、それ自身を無効にするからである。そして、同じ事を、我々は、他の懐疑主義的言明に関しても言うのである。」[20]

さて、ここで示された具体例は、非明証的な言明についての類比的移行が成立することを前提にして語られている。

では、独断論者と懐疑主義者の基本的立場の違いの相剋について考察する。

独断論者は、自ら下した言明の関わる事柄が、そのとおりに、実在と合致していると考えている。この場合 ὑπάρχον とは非常に強い意味を持っている。独断論の独断された言明は、実在に触れているか、更には実在そのものについての言明と解さなくてはならない。

他方、懐疑主義者は、それらの言明されたことを「全き意味で実在する」とは考えていない。言明は、懐疑主義者にとっ

て、あくまでも実在には触れていないのである。この点がまず、両者の立場に大きな相違を与えている。

では、懐疑主義者は、実在に触れない言明を、認識論的にどう位置付け得るのか。「他の諸々のものどもに対して、その言明自身を無効にする（συμπεριγράφει）」のである。彼等にとって、言明は、決して実在に到達しない。全ての言明は、他のそれと相容れない言明と照らし合わされて、対立させられ、決して実在に触れる事無く「無効」にされる。先取りして言えば、これが「判断中止」「エポケー」の構造につながる。

「全ては偽である」はそれ自身も偽であり、「真なるものは何もない」は、それ自身も偽である。非明証的言明に於て、真偽の区別をつける事は、懐疑主義者にとっては、別に何の意味も無い事であった。彼等は、実在に対応する真理を目指していたのではなく、探究しつづけているからである。[21]

VI

この、第七章十五節でも、一貫して、独断論者との対比の下に、懐疑主義者の主張を記述している。

「何よりも重要なのは、それらの諸定式を表現するに当って、懐疑主義者は、彼自身に現れるものを語り、そして、彼自身の情念を、独断的ではない仕方で伝達する。但し、彼は、外から措定された実在については、何事も積極的な陳述はしないのである。[22]」

この章全体の趣旨が、懐疑主義者は独断は下さないという事を立証する点にあった事は予め念頭に置かれなければならない。その上で、独断論者の主張を否定するという形で、逆に、懐疑主義の立場を明確化している。懐疑主義は、独断論と比較対立するという形で、独断論を批判するという仕方で、自らの立場を明示しているのである。

さて、この節でも、その図式は相変わらず守られていて、且つ、言表に関してという形で、一つのテーマを抱きつつ論考

が進められている。

我々が引用した文章は、懐疑主義の立脚点を「最も重要なもの」という語り方に依ってまとめたものだと言える。そこで、その内容の詳細な分析を試みることにする。

まず、「懐疑主義者（筆者挿入）は、以上の諸定式の表現に当って、彼自身に現れているものを語る」という点について考えてみたい。

既に我々は、十三節を考察した折に、懐疑主義者が、「印象に即して、必然的に生じた諸々の情念に同意する」事を確認しておいた。そして、その場合の諸々の情念とは、具体的に、「熱く感じる」とか「冷たく感じる」とかというものであった。

では、諸定式の表現に当って、自らに現れるものを語るとは、具体的には何を意味しているのであろうか。

諸定式とは、十四節で提示された如き言葉のつながり、何らかの命題の事を指示していると考えられるけれど、ここでむしろ重要だとされているのは、それらの諸定式を表現することにあるだろう。定式の表現に当って、懐疑主義者は、己れに現れるものを語るとされる。現われの中に、命題、定式が包括されているのでなければ、このことは不可能である。彼自身に現われるものを語る事によって諸定式の表現が可能になるからには。従ってこの時の「現われ（φαινόμενον）」とは、非常に強い意味を含ませられていると言わねばならない。

次に、「彼自身の情念を、独断的ではない仕方で伝達する」点について考えてみる。

ここでも、ポイントは、伝達する（ἀπαγγέλλει）ことであろう。パトスの言表化の問題が、何故こう迄懐疑主義者にとって、重要なウエイトを占めるのか。彼等は、自分の立場を何らかの形で言葉にしなくては、自分の説を他説と区別出来ない。彼等にとって、何故パトスを表現する事が、それ程迄に気懸りにならねばならなかったのか。心の私秘性の問題が絡んで来るであろう。一方で、独断論者は、何でもよいが、真なる命題を独断し得る。けれど懐疑主義者は、独断は下さない。彼にとっては、彼に現われるもの、彼自身の情念が世界の全てであった。では、その彼が、自分の世界を公にして、或る意味で

客観化してしまうことは如何にして可能なのか。彼は、外界の実在の存在に確証を持てない。[23] 彼の視線は常に自己の内部に向かっている。その彼にとって、自分の立場を一つの哲学として、単に独断主義に対する批判としてだけでなく、自体的に自立した立場として打ち立てる為には、やはり、パブリックな発語がなくてはならなかったのではないか。彼は「魂の平静さ」であるアタラクシアを追求し、その手段として「判断中止」を実行していた。それらが、彼の内的言語に終始しなければならなくなった時、懐疑主義は、哲学とは成り得ないであろう。

最後に、「外から措定された実在については何事も確証しない（…*μηδὲν περὶ τῶν ἔξωθεν ὑποκειμένων διαβεβαιούμενος*）」[24] 点について考察する。

「外から措定された実在」と規定する以上は、対概念たる「内から」という規定が、懐疑主義の立脚点であったと言えよう。彼は、自分自身の現われ、情念についてしか関心を持たないし、それらについてしか語り得ないと考えられる。

懐疑は、懐疑主義者の心の外にある実在に向けられている。彼はそれを疑う。彼等は、自分の心の内部に探究の矛先を向けている。彼は、懐疑することによって、自分の心の内部を観察し、独断しないことによって「判断中止」に到り、「魂の平静さ」へ到達したがっている。

内的現われなり、情念の私秘性は、どこかで打ち破られなければならない。言語化という作用がどうしても必要なのである。懐疑が探すことを自らの使命とし、それを正当化しようとすれば、言語化がどうしても必要なのである。

結論

以上の考察を念頭に置いた上で、序論で提示した問題点に立ち返ってみよう。

懐疑主義者は「探究しないこと」を目指して「探究しつつある」者であるのではないかという一つのパラドキシカルな問

題であった。

この問題そのものの内実を測る事は、取りも直さず、懐疑主義そのものの哲学的意味を調査する事であり、その仕事は、セクストゥス・エムピリコスに止まらず、哲学者と呼ばれ得る全ての人物の著作を吟味することであり、それは、我々には、実際問題として決定的に不可能である。現実に、我々のこの論文に於いては、セクストゥスの思索のほんのごくわずかの部分を垣間見ることしか出来なかった。しかしその状況にあって、敢えて我々の序論での問題点に、何らかの能うる限りの答えを出すよう努めなければならない。

懐疑主義は「エポケー」即ち「判断中止」を目指していた。「エポケー」とは、何事かを否定も肯定もしないところの思考の状態である。それは、イソステネイアを通じて到達できると考えられている。そして彼は、アタラクシアという「魂の平静さ」に到る。

懐疑は、セクストゥスにとっては、あくまでも「探究しつつある」ことを意味しており、或る局面にあって、それは、懐疑主義者自身の心の内側、心の私秘性を越えるものでなければならない。

セクストゥスにあって、探究しつつあるとは決して、探究しなくなることではなかった。パラドックスは破られなくてはならない。彼は、懐疑主義者として、心の私秘性を越え出る。それが彼の探究であった。従って、我々はやはり「エポケー」を「判断中止」と訳するよりも「判断保留」と訳すべきかもしれない。中止にすると、探究しない事を意味し得るからである。

懐疑しつつ、「エポケー」を目指しつつ、懐疑主義者は、常に探究を持続させているのである。

…ζητοῦσι δὲ οἱ σκεπτικοί.(25)

註

使用したテキストは、Loeb Classical Library; Sextus Empiricus, I, trans., R. G. Bury である。

(1) cf. M. F. Burnyeat (ed.), *The Skeptical Tradition*; California U. P., 1983

(2) Sextus Empiricus, *Outlines of Pyrronism*, I, ch. 3　以下では P. H. と略記する。

(3) cf. C. Stough, *Sextus Empiricus on Non-Assertion*; *Phronesis* 29 1984 p. 137-164

(4) cf. Plato, *Meno*, 79e6 seq.

(5) P. H. I, ch. 1-2

(6) P. H. I, ch. 2-3

(7) cf. *Greek-English Lexicon* (Conm. by H. G. Liddel & R. Scott)

(8) P. H. I, ch. 4, 8 節

(9) P. H. I, ch. 4, 10 節

(10) P. H. I, ch. 4, 10 節

(11) *ἰσοσθένεια* という概念については、多少テーマ上のズレはあるが、次の論文を参照されたい。
cf. Bernard Williams, *Descartes's use of Skepticism*; *The Skeptical Tradition*, p. 337-352　猶、M. F. Burnyeat, *Can the Sceptic Live his Scepticism, Doubt and Dogmatism*; Clarendon Press, 1980 (M. Schofield, M. F. Burnyeat, and J. Barnes (ed.)) p. 20-53 での *ἀταραξία* への言及に着目してはいるが、現段階では、それについてのコメントは控えておく。但し、彼の主張の如く、懐疑主義者が自家撞着に陥るという論点については、懐疑主義者を、「探究しつつある」者という視点から見ている我々としては、必ずしも承服出来ない。

(12) P. H. I, ch. 6, 12節

(13) P. H. I, ch. 6, 12節

(14) 懐疑主義者が、この様に、自らの立場を規定する時、当然、C. Stough, の指摘する如く（前掲論文）、矛盾律との関係が問題になり、また、懐疑主義自体の立場の一貫性（coherence）も問題になり得る事は予め断わっておく。但し、現在の段階では、その論旨に対する積極的なコメントは控えたい。更に言えば、C. Stough と G. Striker, *Sceptical Strategies, Doubt and Dogmatism*; Clarendon, 1980, p. 54-83 との議論にも大いに着目すべき点が多々ある。

しかし、何よりも重要なのは、C. Stough の論文が、interpersonal communication に言及している点である。この点を我々は決して見逃してはなるまい。

(15) P. H. I, ch. 7, 13節

(16) C. Stough 前掲論文。特に注の33の考察を参照の事。

(17) P. H. I, ch, 7, 13節

(18) 因みに、藤沢令夫訳では、「……たとえば自分が熱かったり冷たかったりするような場合に、『私には熱くはないように思われる』とか『冷たくないように思われる』などとは言わないであろう。」と、なっている。（『ピュロン哲学の概要』第一巻・『ギリシア思想家集』世界文学大系63（筑摩書房一九六五））

然るに、懐疑主義の基本的立場は、決して実在に触れ得ないとするのであるから、「私が熱かったり冷たかったりする」と言う事は誤解を招く恐れがあろう。ここでは、「例えば（ὅιον）」という形で、先行の πάθεσι に承認を与える事の内実が、逆から説明されているのである以上、ドグマではない箇所は、懐疑主義者のポジティブな立脚点であるパトスであると、我々は考えなくてはなるまい。

語源的にみても、θερμαίνω は受動形の場合、to be heated, feel the sensation of heat とあり、Pl., *Tht.* 186d を引用しているのである。（*Greek-English Lexicon*, Liddel & Scott, p. 793）

(19) この箇所での考察に当って、我々は Plato, *Theaet.* 151e8 seq.でのプロタゴラス主義に対する、ソクラテスの解釈の場面を思い浮かべる。更には、M. F. Burnyeat の未刊行の解釈である *Introduction* に於けるヘラクレイトス説での自己矛盾、言語化不可

能という線を強く意識している。

(20) P. H. I, ch. 7, 14 節

(21) 非明証的言明を無効にする場面で、我々は、Plato, *Theaet.* 169e7-171c7 のプロタゴラス説の self-refutation の議論構造を想起してしまう。

プロタゴラス説とセクストゥスの説との相互連関を問う事は、翻って言えば、相対主義と懐疑主義の相互連関を問う事になる。だが、そのテーマはあまりにも大きすぎる。但し、このテーマに至る基本的発想を、我々は、J. Annas & J. Barnes, *The Modes of Scepticism*, Cambridge U. P., 1985 を読むことによって自然に得た。その時、相対主義からは何故エポケーに進まないのかという疑念が過った事も否めない。

因みに、同書の Index p. 200 では、Plato, *Theaetetus* が、古代に於ける懐疑主義を示唆しているという、注目すべき指摘がなされている。

(22) P. H. I, ch. 7, 15 節

(23) P. H. I, ch. 7, 14 節

(24) P. H. I, ch. 7, 15 節

(25) P. H. I, ch. 1, 3 節

（本学大学院博士課程・西洋哲学史）